



本多勝一



極限の民族



カナダ・エスキモー



ニューギニア高地人



アラビア遊牧民





本多勝一



極限の民族

カナダ・エスキモー

ニューギニア高地人

アラビア遊牧民



朝日新聞社

本多勝一

(ほんだ・かついち)

1931年長野県に生れる。京都大学農林生物学科を経て朝日新聞に入社。現在、東京本社編集委員。著書に「戦場の村」(朝日新聞社)「きたぐにの動物たち」(実業之日本社)「山を考える」(同)「アメリカ合州国」(朝日新聞社)「中国の旅」(同)「NKK受信料拒否の論理」(未来社)「事実とは何かⅠ・Ⅱ」(同)「貧困なる精神」(すずさわ書店)「本多勝一対談集」(同)などがある。

極限の民族

カナダ・エスキモー
ニューギニア高地人
アラビア遊牧民

定価 1400 円

1967 年 6 月 25 日 第1刷発行

1987 年 12 月 10 日 第38刷発行

著 者 本多勝一

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03-545-0131 (代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京 0-1730

© 1967 K. Honda

ISBN4-02-254525-9 Printed in Japan

△極限の民族／目次▽

第一部 カナダ・エスキモー

「ウスアクジュ」への道……………セ

白夜の出現——部落の選択——異臭の家——眠らぬ子どもたち——カヤグナ家の同居人……………

極北を生きぬく知恵……………六

日本は北極より寒い——「食事」とは何か——世界最高の防寒服——主婦の仕事——カカア天下——イスマタのユーモア——カヤグナの心……………

アザラン狩り……………三

名射手ムーシシ——名ハンターの狩猟ぶり——エスキモーに関する退屈な話——「食いだめ氏」の狩猟ぶり……………

犬を甘やかしてはならぬ……………四

悲鳴の大合唱——ヒューマニズムを犬に使ってみると——ソリ——社会——パツキデユの役目——蛇足……………

カリブー狩り……………五

内陸へ——接近——総攻撃——残酷とは何か——狩猟に生きる喜び……………

雪の家……………六

「雪の家」への誤解——雪の家の作り方

太陽の沈まぬ国

世界で最も単調な環境——プライバシーのない世界——配偶者交換——子ども

と故郷——数の観念——飢餓への道——教育

三

セイウチ狩り

のたうつ材木——命中——大きな拾いもの——殲滅戦——胃袋から出たムキ身

四

の貝——生肉の味の順位——私たちの問題

エスキモーの心

お前は白人か——父と子——ジャバギア老人——見栄っぱり競争——財産——

一〇〇

「イスマタに五円玉」——「キシアニ」——母と子——世界一の自殺率——夕
の祈り——美女の定義——酔っぱらったエスキモー

極北の動物たち

サケ釣り——極北の動物たち

一〇七

遊獵の民

部落の成り立ち——肺結核とハシカ——遊獵の民——あまりにも勝手で、傍若

二三

無人で、しかも全く役に立たぬ地名——無神経な国語政策の犠牲者——歌う老
人たち——不完全歌集——娘ごころ——別れ

第二部 ニューギニア高地人

意外なジャングル 一五

この人々——意外なジャングル——ウギンバ村のウギンバ部落——モニ族とダニ族——アマカネ——ゴサガ(ベニス・ケース)——“ウギンバ病院”

モニ族の簡素で家庭的な生活 一六

ヤゲンブラ家——マツチの有難味に関する疑問——容器のない生活——現地食主義の挫折——塩作りの知恵——イモと生肉の差——味に対する構え——指なしばあさんは語る——ハチの巣狩り——宝貝の通貨——棒一本だけの農具——一夫多妻における妻の側の心——“服装”を交換してみると

石器時代も案外不便なものではない 二五

石器時代の最後——石斧の切れ味——純石器時代を求めて——石器時代も案外不便なものではない

アヤニ族とナツソウ山脈横断の旅へ 三〇

アヤニ族の交易隊——ザンガへの道——耐寒力の問題——赤道下の亜寒帯——悲しきニューギニア——雨の大高原——植物の恐怖——迷い込んだ部落

ニューギニア高地人に襲われた日本軍 三五

「ヒト食い人種」か?——襲われた日本軍

ダニ族の団体生活と奇妙な男たち 三六

「男の家」と「女の家」——団体生活——社会形態に影響される個人の性格——コ
ーラスとヨーデルの文化——酒とタバコ——オシャレと流行の原理——美人投
票は成立しない——ブタと共に寝る奥様の生活と意見

ホモ・ルーデンス 三六

誇り高き人々——対立——戦争——葬式——墓場——ホモ・ルーデンス——原
始生活の幸福感——ザログ姉妹

第三部 アラビア遊牧民

アラビア半島内陸のサバクへ 三九

夏のサバクを選ぶ——サバクの列車——サバクの首都リヤド——遊牧民を求め
て——お茶攻め——アフヒダードのテント村

親切で慎み深いベドウィンたち 四〇

遠慮ごっこ——招待の榮譽——気温と体温——厚い障壁——お祈り

ラクダに人間が飼育されるような生活 四一

ムタウワの老人——遊べない遊牧——ラクダとともに——サバクの船——フア
ヘドの生涯——水と意志

サバクの夜の主人公は野生動物である 四二

サソリ——スカラベ(糞ころがし)——ダブ(アガマトカゲ)——夜の訪問者たち

「虚無の世界」としての大砂丘地帯……………三二

超異常乾燥——水とアラビア——砂丘地帯——動くサバク

羊飼いの重労働でなかなか大変だ……………三二

フセインの井戸——妻たち——羊飼いのサリム——サリムの歌

親切で慎み深いベドウィンの正体……………三三

うるさいサバク——テイク・アンド・テイク——親切の正体——サバクの掟——

——エスキモーとベドウィン——略奪文化——にがい握手——人間不信

ベドウィンの方が普遍的で、日本人こそ特殊なのだ……………三三

秘境日本——一挙一動すべて文化

「月の沙漠」の夢と現実……………三三

おぼろにけぶる月の夜——アラビア半島の横断

あとがき……………三三

解説Ⅰ 記録と小説（竹西寛子）……………三三

解説Ⅱ 地上最後の原始文化（泉 靖一）……………三三

解説Ⅲ 「秘境日本」発見の旅（伊藤勝彦）……………三三

第一部 カナダ・エスキモ

●おもな登場人物

——カッコ内の数字は年齢を示す——



イスマタ（37または39） ウスアクジュ部落のリーダー格。
狩猟の腕前が段違いにすばらしい。ユーモアたっぷりの日常だが、まれに激昂することもある。本名アグナクジョアック。



ノカラ（34） イスマタの妻。
無愛想で、カカア天下の代表的女房。カヤグナの妻オカンゴに、私
たちをめぐって対立的感情を抱いている。



カヤグナ（31） 私たちの住みこんだ家の主人。
狩猟の腕は最低にへたくそだが、部落のインテリ的存在として、隠
然たる力を持っている。



オカンゴ (31) カヤグナの妻。

一見無愛想だが、よく気のつく、働き者。私たちに対しても、無表情のまま、親切な態度で世話をしてくれた。



ムーシシ (35) 射撃の名人。

最もひとのよい人物で、イスマタとカヤグナの間において潤滑油のような役を果たす。コーカソイドの血が混じっているが、ビヘイピアもカルチュアも完全にエスキモー。



イヌーティ (31) ムーシシの妻。

エスキモーとしては表情が豊かで、部落の主婦では一番の愛嬌者。親切で、働き者でもある。



ジャバギア (60以上) カヤグナの養父。

エスキモー的マナーが純粹なたちで残っている。人のよいおじいさんだが、礼儀正しく、息子へのしつけもしっかりしている。

「ウスアクジュ」への道

白夜の出發

二人のエスキモーが、犬ゾリで私たちを送ってくれることになった。

二人は、初めて私たちに会ったとき、はにかみがちな笑顔を顔いっぱいに広げて近つた。そして立ちどまつたまま、いつまでも、ただ単に笑っている。エスキモーのあいさつは、できるだけ嬉しそうに笑い続けることだときいていた。私たちも、できるだけ嬉しそうに笑い返す。いや、こんなに愛想よく笑いかけられては、だれだって自然に笑いださざるを得なくなってしまう。

あんまりいつまでも単に笑い合っているのは、氣違ひ同士みたいでおかしいから、覺えたばかりのかたことエスキモー語で話しかける――

「キナウイ（何て名だね）」

「イケトソク」「イギ」――答えるなり、二人は顔を見合せて「イヒヒヒ」と笑った。つづけて私が何か言うたびに、

二人とも「イヒヒヒ」と笑う。こんなふうに笑うのは、エスキモー語の「はい」が「イー」または「ヒー」だから、イーと答えたその口で笑いだすせいかもしれない。「日本から来た」というと「イー、イヒヒヒ」。「飛行機で来た」「イー、イヒヒヒ」。「エスキモーとよく似てるだろう」「イー、イッヒヒヒヒヒッ」。

出發は夕方の六時だという。もつと朝寝しておけばよかった。目的地は、約一五〇キロ南のウスアクジュ部落。何日かかるかは、雪のしまり具合と、犬ゾリの調子と、お天気次第だ。あわててはいけない。

だが、出發とは「出發準備開始」のことなのだ。午後六時になると、二人はそれぞれのソリに犬をつなぎ始める。

イケトソクは一〇匹、イギは一二匹。荷物はたいした量でもない。炊事用具を入れた木箱。寝具の毛皮。私たちのテントと食糧。セイウチの輪切りにした胴体……。セイウチは、人間と犬との共通の食糧だ。生のまま凍って、材木のように硬い。二人は、出發準備よりも、隣人たちとおしゃべりし、ふざけ、笑い続ける方に大半の時間をかけている。やがて、二台の犬ゾリは何となく動きます。「オワワイ、オワワイ」と、二人は犬たちには声をかけるが、私たちには何も言わない。この部落を訪問中の、エスキモー語を自由に話すイギリス人と立ち話をしていた私たちは、彼に

「そら出発だ、置いてかれるよ」と言われ、あわててソリにとひ乗る。出発らしい雰囲気は毛ほどもない。荷の積みこみを手伝っていたイケットノクやイギの妻たちは、とつくに家へ引っこんだ。ふざけ合っていた隣人たちもいなくなった。手を振って見送るのは、エスキモーではなくて、一人のイギリス人だけ。その影が、地平線に近づいた太陽の逆光の中で、小さな黒点となつて消える。

五月一八日午後八時すぎ。私たちはこうして、ホルビーチのエスキモー部落をあとにした。メルヴィル半島の東海岸。北緯六八度五〇分、西経八二度一〇分。快晴無風。気温零下一八・五度。

北極圏は、すでに夜のない季節にはいつている。前日からまる一昼夜続いた吹雪は、夕方からすっかりやんだ。限りなくひろかる大雪原の地平線上、北西の方角に、太陽が冷たく輝く。犬と、ソリと、人間の影が、雪の上に長くのびて走る。私を乗せているイケットノクが、太陽を指さして言った——「ノクリイルノク」。私たちが奇怪な発音のエスキモー語で話しかけるので、彼は単語を教えるようとしているのだ。復唱してみせると、また「イー、イヒヒヒ」。そして、次々と指さしながら「アブノト(雪)」。「キンメルック(犬)」……。

陸地は海面すれすれの低い標高のまま西の地平線に消え、

海は完全に凍結したまま東の水平線に消える。そのすべては雪におおわれ、陸も海も区別がつかない。犬ノリは、主として海の上を海岸ぞいに南下する。真空のように澄みきった大気。あまりにも白い雪と、濃い影とのコントラスト。黙々とソリを引くエスキモー犬たち。ソリの下で、かすかな金属性の音をたててきしむ雪。ときどき思いだしたように、イケットノクが指導犬の名をよぶ——「オマンゴアリ」。

すると、ひとときわ立派な体格をした先頭の犬が、走りながらすかに横をむいて反応を示す。

地平線に向かって斜めに近づいていった太陽が、午後一時半、雪を淡いアカネ色に染めながら沈む。が、夕焼けはそのまま朝焼けに移る。午前一時半には、太陽は再び北東寄りの地平線に顔を出した。わずか二時間の日没。その間も、新聞か衆に読めるほど明るい。初めて経験する白夜の旅に、私は軽い興奮を覚え、眠気も感じない。地平線にノンキロウが現われた。前方の地平線は、次々とちぎれとふ雲のように見え、後方の地平線は、逆光の中で燃える湖のようだ。

イケットノクとイギは、二、三時間ごとにソリをとめてひっくりかえす。ガソリンコンロで雪をとかして水を作り、ソリの滑走面にぬるためだ。カリブー(トナカイの一種)の毛を水につけてサノとはくと、滑走面は直ちに水のワックス



* 午前2時。すでに高く上った深夜の太陽をあびて、私たちの大ブリはウスアクジュ部落への旅をつづける。凍結した海と、低い平地とは、ひとつの大雪原となって区別がつかない。

でおおわれ、滑りがよくなる。わざわざ深夜を選んで旅をするのは、気温が低くてソリが滑るからである。この作業中も、二人はよくしゃべり、よく笑い、あとで必ずお茶をのむ。再び走りだすのは、たいいてい一時間余りあとだ。

午前四時半。約五〇キロ南下した位置でテントを張る。カルマンとよばれる海岸の沖約二キロの海氷上。太陽の輝きがようやく増しはじめるところ、私たちは寝袋にもぐる。

部落の選択

「エスキモー」とは「生肉を食う連中」の意味だ。クリー・インディアンがつけたアダ名である。私たちも覚悟をしていたが、目的地に着かないうちに、生肉を食うことになろうとは思わなかった。食事は出発の前と寝る前にはとるが、一日一〇時間近いソリ旅行中は、とくに食事時間などない。イケトックとイギは、ソリのうしろにくくりつけたセイウチの胴体を、ときどきナイフで切りとってはパクパク食べる。しりごみしていたら腹がへって仕方がないから、私たちも食うことにする。

凍結した生肉は、口に入れたときはただ冷たく、シャリシャリしている。が、次の瞬間、生ぐさいにおいが口いっぱいに広がる。かんでいるうちに、においはますます広が